鳥取市総合教育センターだより

第４号　令和３年１２月１４日発行

〒680-0053
鳥取市寺町 150 番地
TEL: 0857-36-6060
FAX: 0857-26-3878
E-mail:
kyo-center@city.tottori.lg.jp

変わること・変わってはならないこと

所長　安田 直人

本年度より始まった一人一台端末の利活用においては多くの課題がある中、各学校で積極的に有効活用を図っていただきありがとうございます。

先日、授業や生活の場面での効果的な ICT の活用をテーマに、オンラインによる遠隔研修を実施しました。倉田小学校と南中学校に実践を紹介していただき、各学校での取組について情報交換を行いました。各教科や総合的な学習の時間等では様々なアプリが活用され、それぞれの特徴を生かした「主体的で対話的な深い学び」につながる魅力的な活用がなされています。また、授業以外の場面でも日常的に有効活用されているようです。一日の学校生活の中で、授業以外の場面での活用を各校の取組でつないでみました。

【登校】健康観察・心の天気(Forms)、宿題の答え合わせ(Air Drop)

【下校】連絡帳の記入・確認(Classroom)、各種調査・アンケート・行事等ふり返り(Forms)

【クラブ活動・委員会活動・部活動】

話し合い活動(Jamboard)、動画作成(iMovie)、プレゼン作成(Keynote)、タイピング練習(キーボー島)、名簿作成(スプレッドシート)、動作・フォーム等の確認等(カメラ)

【放課後】宿題(e ラーニング)

職員会・研修(Meet, Jamboard)、教職員間の連絡(Classroom)

その他にも、保健室登校や相談室登校の児童生徒が学級や授業の様子を見たり、サポートルームに通う生徒が e ラーニングで学んだり、学校からの連絡を確認するなどの活用法もありました。各学校の取組の参考となるよう、来年度も ICT 研修の充実に引き続き努めたいと思います。

ところで、市役所でもこれまでも ICT 活用による業務の効率化が推進されてきましたが、9 月議会よりすべての会議でタブレット端末が導入され、紙媒体と併用しての審議が始められました。一般質問時にはパネル・資料等が大型ディスプレーに表示されるなど、ペーパーレス化や ICT 化が図られています。

社会の変化が急速に加速する一方、変わらないことを求められることが最近ありました。総合教育センターに仲間入りした「宇宙メダカ」です。宇宙空間のスペースシャトルで生まれたメダカの子孫をさじアストロパークよりいただきましたが、よく見るヒメダカと何ら変わりがありません。「変わらない、変異しないことを経過観察している」とのことで、これから世代を継承していってもいつまでも変わらず元気でいてほしいと思います。

研修企画係

中堅教諭等資質向上研修　学校訪問

鳥取市は、学校の中核となって教育活動を行っている中堅教諭への研修を、教職員研修の中心として位置付けています。昨年度に続き校外研修は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、これまですべてＷｅｂ会議による遠隔研修で実施しています。

１１月から事務局担当者が各中堅教諭の勤務校を訪問し、授業参観と校内研修の様子について聞き取りを行いました。

授業実践

授業では、多くの方がＩＣＴを活用していました。中堅教諭等資質向上研修で放送大学の中川一史教授から、まずは日常的な活用を進め、教員も子どももタブレット端末の操作に慣れることが必要だというお話を聞きましたが、各校での取組に生かしている様子が見られました。中には情報化推進リーダーとして校内のＩＣＴ活用を進めるための研修を行っている方もおられました。ぜひ今後も自身の取組だけでなく校内ＯＪＴによって活用する教職員を増やしていってほしいと思います。

校内ＯＪＴ

校内では自主的な研修会を実施している方もおられました。研修会は、放課後や空き時間を活用して少人数で行っており、そのメンバーは主に若手の教員でした。中堅教諭が中心となり、校外研修で学んだことやこれまで経験を元に意見交換を行っておられるとのことでした。話を聞いて印象的だったことは、お互いの思いを本音で話すことで、中堅教諭も含めて参加者全員が元気になったという話です。学校にはいろいろな課題があり対応で大変なこともありますが、若手から学校を変えていこうという気概を持つきっかけとなっていることがわかりました。この開催の背景には校長先生や教頭先生のサポートがあり、中堅教諭が校内ＯＪＴの中心となるような仕組みづくりがされていました。

多くの学校が日頃のコミュニケーションを大切にして校内ＯＪＴを進めていました。これからも中堅教諭が周りの先生と協働して積極的に学校運営に参画できることを願っています。

児童生徒支援係

サポートルームの取組

不登校や行き渋りは、特定の子どもに起こることではなく、どの子どもにも起こりうることです。不登校となる背景は多様ですが、「学習面の困難さ」「人との関わりの苦手さ」がきっかけとなっていることも少なくありません。サポートルームでは、個別及び小集団での活動や支援を行い、学校復帰や社会的自立をめざしています。

学習　月～金の午前 50 分×2 コマ

個々の状況に応じて児童生徒が主体的に決めた内容にそれぞれのペースで取り組む。

漢字・計算ドリル、プリント、問題集の他、タブレットを使った学習など各自決めた内容に個別に取り組んでいます。パーテーションで区切るなど、個人の状況に合わせてスペースの工夫もしています。

学び合い活動　月水木の午後 1 時間

生活体験を広げ、集団で活動することを通して集団への適応力や社会性を培う。

農園作業、調理実習、茶道体験、宇宙教室、手話教室、消しゴムはんこ作り、ＡＥＤ講習会、スポーツ、デイサービスや保育園との交流体験の準備等、小集団で様々な活動に取り組んでいます。

ふれあい活動　原則毎週火曜日

地域の社会施設や人材を活用し、4 領域「勤労生産」「創造・文化」「自然体験」「社会体験」の体験を通して地域のよさを感じたり、人との関わり方や社会性を培ったりする。

登山や地域散策、動物とのふれあい等の自然体験活動、新聞社や警察学校見学等の社会体験活動等、1 日または午前半日を単位として多様な活動をしています。

サポートルームの活用例

学校、保護者と連携しています。

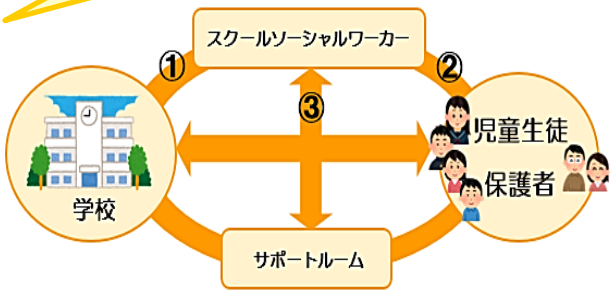
実態と主な支援	現在の状況
小学校で全欠席になる。課題である集団生活のルールを守ることを目標に、毎日すなはまに通って学習や様々な活動を行った。すなはまでの生活が落ち着いたため、保護者、学校と協議して月に 1 回チャレンジ登校する日を設定した。	すなはまから登下校することを開始する。登校する時間を学校と調整しながら、段階的に時間を延ばし、回数も増えてきている。
相談室登校をしていたが、その後欠席が続くようになった。保護者が総合教育センターに教育相談したことをきっかけに、すなはまにつながった。保護者と学校は、児童の実態から、すなはま利用と学校の併用について協議。学校復帰に向けて、学校との関係を切らさないようにしながら、すなはまでは学習する習慣と人との関わりが少しずつできるようになることを目標に通所を開始した。	本児と保護者と相談の上、曜日指定で短時間の利用を開始した。すなはまでの生活に慣れ、あいさつや他の子どもとの関わりも少しずつ増えてきた。学校にも時間帯や曜日を決めて短時間ではあるが登校している。
低学年で不登校となり、自宅にこもることが多くなった。学校の紹介ですなはまを見学。まず外に出ることを目標に親子で「ふれあい活動」に参加することを提案した。	直後に「ふれあい活動」に親子で参加したことをきっかけに自宅外で過ごす時間が増えた。

スクールソーシャルワーカー（ＳＳＷ）との連携

「総合教育センター」に組織改編となった本年度より、スクールソーシャルワーカーとサポートルームの連携を強化しています。その一つが不登校及び不登校傾向の児童生徒やその保護者との関わりです。

① サポートルーム入級に係る保護者との話合い等にＳＳＷが参加し、すなはまの様子を伝えたり、学校や保護者の相談に乗ったりしている。

② ＳＳＷが、サポートルームに通う児童生徒の様子を見て声をかけたり、子どもたちが作った料理を一緒に食べたりするなどの交流をしている。保護者と直接話をすることを通して関係づくりもしており、サポートルーム見学や入級説明会に参加する場合もある。

③ 学校での児童生徒の情報や保護者と直接話をした内容をＳＳＷとサポートルームが共有し、児童生徒や保護者へのよりよい支援につなげている。

具体的な事例をご紹介します。